ゼウスな人々

第一話

美少女メデューサ

どらやま　てっさ
道楽山鉄茶

ゼウスな人々　第一話　美少女メデューサ

　はるか古代のギリシャ、オリンポス山のふもとに族長ゼウス率いる大きな集団が隆盛を誇っていた。彼らは、オリンポス山からの豊穣な土と雪解け水、目前に広がるエーゲ海からの多種多様な海の幸、そしてさらに、ヨーロッパとアジアの交点という地の利から交易という経済利益を受け、豊かな暮らしを享受していた。
　生活にゆとりが出来れば、文明が発達する。ゼウスの町は豊かな国力を使い、世界の文明・文化の一大中心地として学問や芸術、科学技術を発展させていた。

　今日は年に一度の祭りの日、町の人々はこの日が来るのを楽しみにしていた。
　鍛冶屋を営む双子の兄弟も祭りの初っ端に行われる『美人コンテスト』が楽しみで、朝からわくわくと仕事が手につかない様子だった。
「へへへ‥‥何時からだったかな」
　鍋を磨きながら、弟のポルックスが尋ねた。
「正午きっかりだ。いいか、一時間前に席を取りに行くからな。遅れるなよ」
　包丁を研ぎながら兄のカストルが答えた。
　二人が営む鍛冶屋は、商品が丈夫で長持ちすると評判が良く結構繁盛していた。いつもなら気合の入った掛け声と槌打つ響で賑やかな職場だが、今日は二人とも椅子に座ったまま商品を磨いて時間を潰していた。コンテストが気になって気合が乗らないこんな日は、槌を振るうことなど危なくて出来ず、商品を磨くしかする事が無かったのである。
「今年も他所の町からかわい子ちゃんが来るかな～　去年みたいなのが沢山来ればいいのにな‥‥」
　弟は昨年のコンテストを思い出し、遠い目をした。
「そりゃぁ、来るだろう。参加賞が結構高くなってるからな、いろんな地方からいろんな女が押しかけてくるぞ」
　参加者には、旅費・宿泊費だけでなくたっぷりと小遣いが支給される。それだけでも十分なのに、もし優勝でもしようものなら、一生安泰に暮らせる御褒美が待っている。それを目当てに、コンテストへの参加者は年々膨れ上がる一方だった。
「へへへ、兄貴はエジプトの娘がいいか？　インダスの娘がいいか？　どっちかな？」
「俺か‥‥俺はヨーロッパの女がいいな。俺好みの、透き通るような白い肌をしてるからな」
「白い肌なら、アテナさんはどうかな？　久しぶりに参加するって聞いたけど」
「え？、アテナさんが？‥‥嘘だろ、お前、また騙されたな」
　弟のポルックスはお人好しで騙されやすい。この町の住人からあくどい嘘をつかれる事は無いが、からかい半分の嘘を吹き込まれる事が多かった。
「う～ん‥‥居酒屋で聞いたからな。やっぱ、嘘だったのかな？」
「当たり前だろ、居酒屋でまともな話、聞けるわけないだろ」
「あ～あ‥‥久しぶりにアテナさんを見れると思ったのに‥‥」

弟はいかにも残念そうに溜息をついた。
二人が話題にしているアテナは、軍隊の参謀長と軍医長を兼任している高官であり、ゼウスの長女でもあった。知恵が有り戦略に長けており、さらに医学にも造詣が深く、参謀長と軍医長は適任だと云われていた。その上、祖母であるヴィーナスの美貌を受け継いでいるのだから、才色兼備の典型である。
アテナは十八歳になった時、年齢制限を解かれ、さっそく美人コンテストに参加した。結果は、ヴィーナスに次いでの準優勝。町の人々は、老婆であるヴィーナスが優勝した事に納得せず、コンテスト会場で抗議の声を上げた。翌年からは、今まで不明確だった採点基準がやや明確になり、さらにゼウスの親族は出場を自粛するようになった。ゼウスの親族であると言うだけでどうしても点数が高くなる傾向にあったからだ。
そして、アテナはそれ以降出場していなかった。
しかしここ数年、アテナの出場を望む声が増えてきた。十八歳で輝いていたアテナは、今、三十歳になっている。もう峠は越えたかも知れないが、今のうちに彼女の美しい姿を記憶に留めておきたいとの声が、男達のみならず女性達からも盛んに上がるようになっていた。

「ねえ‥‥。もう行こうよ。落ち着かなくって、じっとしてらんないや‥‥」
弟の切なげな声に、兄は、
「うるさいな。まだ十時だ、我慢しやがれ！」
と叱り付けたが、弟が恨めしそうにこちらを見詰めているのに気付き、
「なんだその目は‥‥。お前は仕方ない野郎だな‥‥」
拳を振り上げながらゆっくりと立ち上がった。
「ああ〜‥‥、勘弁してくれよ‥‥」
鍋を被って頭を押さえる弟に、「へへへ」と兄は笑ってから、
「じゃ、行くぜ！」
と脱兎の如く駆け出した。
「あ！、待ってくれ、兄貴〜」
出し抜かれた弟は、大慌てで兄を追いかけた。
そんな弟の姿を見て町の人々は大笑いした。
必死になって兄を追いかける弟の姿は時々見かけるが、今日の弟は鍋を被ったまま走っていたからだ。

正午、人々はコンテスト会場に集まった。
大広場の端に縦横十メートル程の祭壇があり、その後ろに参加者の控え室がある。コンテストでは、参加者は名前を呼ばれると控え室のカーテンを開け祭壇に足を運ぶ、そして、聴衆に語りかけるなり、歌を歌うなり、踊るなり、好きなパフォーマンスをして、退場の合図で控え室に戻る、という手順を踏む。
祭壇正面の最前列には貴族達が陣取っており、彼らの投票でコンテストの優勝者が決まる。採

点は、エロス、知性、神秘性の三大要素を評価するとなっているが、審査員によって配点がまちまちなので毎年票が割れる。まずはエロスであるが、これを外せば話にならない。つまり最も重要視されている。但し、過剰・過激なエロスを良しとするか悪しきとするか、これで極端に評価が分かれている。次に知性であるが、エロスが外面的であるのに対して、知性は内面の美しさ・輝きと云われている。これも過剰だとただ単にうっとしいだけの性質になってしまい、どこまでを良しとするかで各審査員考えが異なっているようだ。最後に神秘性であるが、これは、不思議な魅力、未知なる魅力だと云われており、エロスでも知性でもないが、とにかく魅力的だと感ずればそこに神秘の魅力が存在するのだと説明されている。

多くの出演者は一番演じやすいエロスで勝負をする傾向にある。

十八歳になれば出演資格が与えられ、その頃から数年間は最高にピチピチしている自分の姿態をいかに魅力的に見せるか、その勝負に出演者達は賭けるようだ。多分今年も、出演者のエロスで会場がむんむんとした雰囲気になるだろう。

祭壇正面二列目以降や祭壇側面には一般庶民が群がっている。大半は男性だが、女性の姿もちらほら見受けられる。彼女たちはコンテスト出場者の化粧や衣装を研究し仕事に役立てようとする美容や装飾品関係、又は水商売の者か、もうすぐコンテスト出場権を得る少女達であった。

「では、只今より、美人コンテストを開始する」

進行役が宣言した。

「オオオー」

観客は歓声と共に拳を振り上げた。

「まずは一人目。‥‥遠い異国の地を渡り歩くジプシー族、そのジプシー族の秘蔵美少女、ローラ！」

一人目はジプシー族の少女。

か細い少女であるが、力みなぎるステップで舞台を激しく踏み叩く。

舞台はまるで太鼓のようにうねり弾け、聴衆の身体を揺さぶる。

ゼウスの町の人々はこの激しいリズムに当初戸惑いを覚えたが、すぐに受け容れ、うねりに身体を預けるようになった。

少女が足で叩き出すリズムの機微が人々をうっとりさせた。

いつしか会場上の頭がゆらゆらと、催眠術にかかったかのように揺れている。

少女が打つ手拍子が早くなり、それと共にステップが加速し、そして、「オーレー」の掛け声が会場のあちこちから掛けられ、彼女は停止した。

掛け声を掛けたのは彼女の応援団だけでは無いようだ。

行商人は世界中を旅してる。猛獣が居ない場所でジプシー達と共に夜を過ごす事も有る。そんな時ジプシーダンスを見ることもあった。彼らはダンスの終わりに「良かったぜ」という意味の「オーレー」で演者をねぎらうのが常であった。

「ひゃ～　今年はのっけからレベルが高いや。一番手がこれだもんな、これから凄い事になるんじゃないか」

弟が嬉しそうに言った。

二人目は頭を丸めた女僧だった。
「おいおい、東洋の尼さんだぜ。尼さんが美人コンテストに出ていいんか？」
「知らねえや。出ちまったもんは仕方ないだろ、黙って見てろ」
兄に叱られ弟は口をつぐんだ。
女僧は鈴と木魚を携えていた。
「チーン‥‥」
鈴が小さい音を立てた。
続いて、
「ポクポクポク‥‥」
木魚が鳴り出し、
「南無‥‥」
と読経が始まった。
経は古代ギリシャ語に翻訳されていたが概念は難解である。
最初のうちは必死に経を理解しようと努めていた聴衆も途中で諦めてしまった。
それでも、
「色即是空　空即是色　‥‥」
というフレーズは覚えやすいのだろうか、人々はこの部分に差し掛かるとハッとした感じになり、「色即是空　空即是色」をタイミング良く唱えようとした。
そして、そんな人々の反応に合わせるかのように女僧は「色即是空」を多用した。
「色即是空！」
女僧が拳を振り上げると、
「空即是色！」
と人々が応える。
「空即是色？」
女僧が自分の耳に手の平をかざすと、その耳に向かって、
「色即是空？」
人々が不安そうに答える。
場は、アカデミックなコンサートの雰囲気になり、女僧と聴衆が一体となり盛り上がった。
持ち時間が切れ進行役が締めを即すと女僧は、
「南無〜」
と言い、深々とお辞儀をした。そして鈴をチリチリ鳴らしながら楽屋に引き上げた。
「ひゃ〜　良かったな〜　おいら、お経が分かったよ。色即是空、だからな、空即是色も分かっちゃったよ」
「ふふふふ、南無〜もな」
兄が得意げに応えた。

　その後、何人かのパフォーマンスが終わり、いよいよアテナの出番が来た。
「いよお！　待ってました！」
　会場のあちこちから声が掛かる。
　舞台の中央に大きな貝殻が運ばれた。しかしアテナの姿は無い。
　人々はこれから何が起こるのだろうかと固唾を呑んで見守った。
　暫くして貝殻の口が少し開き、中から歌声が聞こえ始めた。誰もが知っている子守唄だった。
　貝の口は徐々に大きくなり、それにつれ歌声が大きくなる。
　中から光が溢れ出し、赤青緑、三つの色が混じり合い、舞台上に虹の架け橋を作った。虹の橋はゆっくりと点滅を繰り返している。今年のアテナはこの手作り照明装置で勝負にでようとしている。彼女の芸風は「知性」。自分が作り出した美術的発明品を披露し、それと歌や軽い踊りを組み合わせるのが得意だった。
　うっとり、まったりと、光の点滅を眺め、透き通った歌声の子守唄を聞かされ、人々は心地よい眠りに誘われていった。
　もう少しで眠ってしまう、そんなタイミングで歌声が止み、虹の架け橋が消え、そして突然、貝の中から美女が出現した。
　美女はアテナであった。若かりし頃のヴィーナスに似せた化粧衣装をしていた。
　人々は唸った。
　ヴィーナスの誕生を孫であるアテナが再現したのだ。
「きっと、あんなのだったんだろうな‥‥」
　ヴィーナスの誕生を知る者は、もはやこの世には居ない。八十年以上前の事だった。しかしアテナが見事に若かりし頃のヴィーナスに化けたので、人々はヴィーナスの誕生を見たかのように思った。
　アテナは貝殻から出て来て歩き出し、長い金髪を一振りしてから、挨拶をしようとした。
　しかし貴賓席付近を見て目を丸くした。
　その表情を見た警備隊長のヘラクレスは、アテナの視線の先に一人の老婦人が居て、壇上に向かい手を伸ばしている姿を見止めた。
　老婦人は五センチぐらいジャンプをし、指先を壇上に引っ掛けた。そしてよじ登ろうと懸垂する様子だったが、身体を持ち上げる力が無いのだろうか腕が曲がらずダランとしたままである。落ちまいと指先に力を入れているのが身体の震えで分かる。その震えが身体中に伝わり、そして止まり、力尽きた老女は指を離した。
「あ、危ない！」
　人々は悲鳴を上げた。
　老女はバンザイをする格好で後ろ向きに倒れていった。
　きっと後頭部を強打する。皆がそう思った。
　が、次の瞬間、ヘラクレスが両腕で老女を抱きかかえるのを見て安堵の溜息をついた。
「ヴィーナス様、大丈夫ですか？」

　ヘラクレスはヴィーナスの顔を覗き込んだ。
　ヴィーナスは目前に凛々しい顔が迫ったので、恥じらいの色を隠すため顔をそむけ、
「ええ、ありがとうヘラクレス」
　と答えた。

　ヴィーナスの願いは、貝殻だった。
　舞台に登ろうとしたのは、貝殻を欲する念が理性を超越したからだ。
「おばあさま、明日にでもこれをお家にお届けしますわ」
　アテナは優しく微笑んだが、ヴィーナスがかくも強く貝殻を欲する理由に思い当たり愕然となった。
『もしかして、おばあさまは‥‥』
　ヴィーナスは貝殻から生まれ、貝殻を揺りかごにして育った。
　誕生した時はすでに成人だったと聞いており、その誕生も八十年以上前の話。現在の年齢は百歳は超えていると思われる。人生の残り時間も少ないだろう。
　死期を悟ったヴィーナスは、貝殻の揺りかごに揺られながら、貝殻に蓋をして死んでいくつもりなのではないだろうか。
『考えすぎか‥‥』
　アテナは否定しようとしたが、やせ細り皺だらけのヴィーナスの顔を見ていると、否定し切れない思いが込み上げてきた。
「ああ‥‥」
　アテナは天を仰ぎ涙をこらえようとしたが、溢れ出る涙は頬をつたい、きらきらと光りながら舞台上に落ちていった。
「おお〜、なんて綺麗なんだ‥‥」
　アテナの涙は真珠のように輝き、その美しさは人々の心を打った。
　ヴィーナスの誕生、そして、真珠の涙。
　アテナの演技は拍手喝さいのうちに終った。

「次の演技者は、ゴルゴン家の三女、メデューサ！」
　進行役が声を張り上げ紹介した。アテナの余韻で会場がざわついており、それを打ち消すために大声を出す必要があった。そのお陰で会場のざわつきは収まり、観客はメデューサの登場をじっと待った。
「よお、よお‥‥メデューサって、ゴルゴン家の末っ子だろ？　あの、子供子供してた女の子だろ？　何で美人コンテストに出るんだ？　まだ早いだろ？」
　弟がひそひそ尋ねた。
「知るかよ、今日日の女は成長が早いんだろ。黙って見てろよ」
　兄のつれない返事に、弟は、
「ああ、分かった。ここいらで軽いのを見て息抜きするわ」

と腕を組み、目を半分閉じた。

軽快な音楽と共に若い女の子が登場した。
背が高く、足は長く、若さを持て余すが如く、激しく踊りながらの登場であるが、驚くべきなのは、その身体のラインの素晴らしさ。豊満な胸と尻、信じられないほど細いウエスト、違った食べ物で育ったとしか思えないほど見事なものであった。
そんな少女が、今まで見たことがないほど短いスカートを履き、胸の谷間がしっかり見える上着を着て、身体をくねくねさせ踊っている。時々、黒く長い髪をふりふりさせるのが斬新な振り付けで、これは彼女の発明だろう。
「ひゃ〜、いっぺんに目が覚めちまったよ」
弟はゴシゴシと目をしごき、それから舞台上に目を凝らした。
彼の目は少女のスカートを追いかけていた。
何か見えないかな？　と思っているのだろうが、短いスカートの中は覗けそうで覗けない。若いのに見事なガードテクニックであった。
少女は踊りながら胸の谷間から小さなビンを取り出した。そして栓を抜き、中の液体を髪に振り掛けた。髪は濡れてキラキラと光った。
少女は大きく髪を振った。
すると、あたり一面に水滴が散り、キラキラと光った。
水滴は香水なのだろうか、キラキラと同時に柑橘系の良い香りが広がりだした。
少女が髪を振るたびに水滴が散り、キラキラと光る。そして香りが広がる。
髪に付着した液体がなくなる度に、彼女は胸の谷間から小ビンを取り出し液体を補充する。そして髪を振り液体を振りまく。そんな繰り返しで、いつしか会場全体がキラキラ光る靄に包まれ、香水の匂いでむせ返るほどになってしまった。

「あ！、やばい！」
会場から叫び声が聞こえた。
叫んだ主は股間を押さえ慌ててうずくまった。
「やや！」
叫び声は別の所でもあがった。
「おい、お前も座れ。お前の一物が前に居る御婦人の頭に当たるぞ」
兄に言われ、弟は自分の一物を見た。すると、隆々とした状態になっていた。
「ありゃ！？」
弟は慌てて座ろうとしたが、振れた一物が前の座席に座っていた御婦人の頭を叩いた。
婦人は振り返り男を睨み付けた。
「へへへ、あい済みません事で」
弟は座り終え、股間を押さえながら会釈した。
婦人は不機嫌そうにプイと正面に向き直った。

　弟は顔を赤くしながら、
「あの娘、あんなスカートは反則だよ」
　口を尖らせた。

　会場の大半の男たちが一物を隆起させ座り込んでいた。しかし警備隊長のヘラクレスはそうはしなかった。警備責任者として、恥を忍んでも警備状態を解除しなかった。
　彼の一物は常人をはるかに凌駕するサイズだったので、裾がめくれ、ひざ小僧が見えるほど着物の前を持ち上げた。みっともないと感じたのか、彼は裾とひざ小僧を隠すため、軍旗を一物に被せた。そして、舞台上、貴賓席、一般席、まんべんなく目を配り警戒を続けた。時々、ヴィーナスの熱い視線が気になったが、それは自分に対する全幅の信頼なのだろうと解釈した。

　舞台上のメデューサは踊り続けていた。そして今度は胸の谷間の奥の方から違った形のビンを取り出した。その栓を抜き、液体を髪に振り掛け、そして髪を振り回そうとした、その時、
「え～い！　やめ！　やめ！　やめ！　お前は退場だ！」
　進行役が壇上のメデューサに命じた。
　メデューサは一瞬たじろいだが、最後の一振りとばかりに頭を大きく傾け、髪を振ろうとした。しかしヘラクレスが剣を突きつけそれを阻止した。
　メデューサはヘラクレスを睨み付け、進行役を睨み付け、
「締めが残ってる！」
　と叫んだが、ヘラクレスの剣が喉元に突き立てられたのでそれ以上何も言えなくなり、楽屋の方に向かい走って逃げだした。
「欲情を誘うにも程がある。お前の行いはコンテストへの冒涜だ！」
　進行役はカンカンになり、一物を手で押さえつけた。
　彼は暫く考えたのち、何か浮かんだのだろうかハタと手を打ち、
「女僧よ！　東洋の女僧よ！　壇上に上がり経を唱えよ！」
　と命じた。
　経で男たちの精神を鎮めようと思ったのだ。
　再演を命じられた女僧はいそいそと壇上に上がり、経を唱えだした。
　が、男たちが発するモンモンとした気配に圧倒され、
「悪霊退散！　悪霊退散！　南無阿弥陀仏！　南無阿弥陀仏！　ひえ～！」
　と、頭を両手で抱え込み、床に突っ伏す始末。
　結局、そのままコンテストは中断終了してしまった。

「あの女は、魔物である」
　長老の一人が言った。
「その姿を見た者を、石のようにする」
　別の長老が言った。
　メデューサによって石のようにされた男たちは、丸一日経っても石のようにされていた。
「我々は、あの女によって呪われたのだ」
　頭を押さえながら言う長老の額には脂汗が浮かんでいた。
　石のような状態は体力を消耗する。その状態が丸一日続いていたのだ、老人への負荷は相当なものであると思われた。
「あの女の呪いを解く方法は、やはり、首を切り落とすしかないじゃろ」
　その意見に反対する者は居なかった。
　呪いを解くには、呪いをかけた者の首をはねる。それが当時の常識だった。
「人選はヘラクレスに任せよう。ヘラクレスめ、あの女を取り逃がしおって、この件でこれ以上の失態は、よもやせんじゃろ」
　命令はヘラクレスに通知され、ヘラクレスは直ちに人選を行った。
　選ばれたのはペルセウスという青年。美人コンテストの時には他国遠征からの帰途で、石のようにされる難を逃れた幸運の持ち主だった。
「いいか、相手は魔物。呪いをかけてくる。姿を見てはいけない、見ると石になる」
　ヘラクレスの忠告に、「では、どうすれば？」と尋ねたが、「いや、俺にはさっぱり分からん。仲間に聞いてみてはどうだ？」と言われ、仲間に聞いてみると、「見惚れているうちに、石になる。だから見るな」としか教えてもらえない。
「ああ‥‥困った‥‥」
　ペルセウスは頭を抱えた。
　何の対策も浮かばぬうちに出発の時が来た。
「悪いな、お前一人に押し付けて‥‥」
　ヘラクレスに肩をポンと叩かれ、
「いえいえ、私だけが石になっていないのですから、当然です」
　と応えた。

　隊員達に見送られ、ペルセウスは馬に乗りゼウスの町を出た。
　それからかなりの距離を進み、夜になったので野営を開始した。
「もし、石にされたらどうなる？」
　ペルセウスは自問した。
「剣が振りにくくなる。‥‥相手は魔物。剣が鈍れば苦戦するだろう‥‥」
「首をはねれば石は治るのか？」
「どうだかな‥‥長老達の言うことを信じて、結構失敗したからな‥‥」
　やはり、石にされるわけにはいかない。

　一瞬でも石にされてしまえば、その後でメデューサを討っても元に戻る保証が無いからだ。
「何か手立ては無いだろうか？」
　相手を見ずに、相手の位置を知り、相手の攻撃をかわし、相手の首をはねる。
　この答えを馬上でずっと考えていたが、皆目見当が付かなかった。
「あ～あ、こんな時にアマゾネスに依頼が出来ればなぁ‥‥」
　アマゾネスはエーゲ海の孤島に住む女戦士の集団である。
　今はゼウス軍とは対立関係に有り、仕事の依頼は難しかったが、交渉次第では引き受けてくれるかも知れないと思った。
「俺に金があったらな‥‥」
「‥‥アマゾネスに依頼する？‥‥う～ん‥‥いや、やはり、しない‥‥姿を見るなり矢を射かけて来るだろう‥‥メデューサと戦う前に殺されるかも知れない‥‥」
「あ～あ、駄目か‥‥」
　暖めたミルクを一口飲み、ホッと一息付いた時、カップのミルクにペルセウスの顔が映った。
　焚き火に照らされ赤くなった顔が、ミルクの波紋でゆらゆらと映って見えた。
「これだ！」
　ペルセウスはカップを覗き込み、映っている自分の顔を見て、ニヤリと笑った。

「ペルセウスはもう出発したの？」
　アテナがヘラクレスに尋ねた。
「ああ、昼過ぎに出かけたぜ。遠征から帰ってきてすぐの出発だからな、ちと申し訳ないと思ったんだが、長老達がうるさくてな」
「そうか‥‥」
「どうしたんだ？　ペルセウスに何か用か？」
「ううん‥‥いろいろ調べてるんだけど、まだ分からない事が沢山有って‥‥」
　アテナは首を振り、
「それより、ヘラクレス。あんた、メデューサの踊りの最中、あそこに軍旗を被せていたわね」
　とヘラクレスを睨んだ。
「なんだよ、仕方ないだろ、勘弁してくれよ」
　軍隊長のヘラクレスと参謀長のアテナ、どちらが上という訳でも無いが、アテナの理屈には太刀打ち出来ない。ヘラクレスはアテナには逆らわないようにしていた。
「別に文句がある訳じゃないの。その軍旗を貸して欲しいの」
「ええ～？、あれをか？」
「そう。調べたい事があるの。‥‥洗濯してないわね？」
「洗濯？‥‥してないけど‥‥」
　ヘラクレスはアテナの顔を覗き込み、
「お前‥‥匂いを嗅ぐつもりか？」
　と聞いた。

「馬鹿！」
　アテナのビンタがヘラクレスの顔に炸裂した。
「あ～、分かったよ」
　ヘラクレスは慌てて箱から軍旗を取り出し、おどけた感じで、
「では、参謀長殿。私の軍旗を大切にお使いください」
　と手渡し、最敬礼をした。
　アテナはむすっとした表情で部屋から出て行った。

「あ～‥‥やっぱドキドキするな～‥‥本当にこんなんでいいんかな？‥‥」
　メデューサの家の玄関先でペルセウスは胸の高鳴りを鎮めようとしていた。
　右手には大剣、左手には大盾、ペルセウスのいつもの装備であるが、少しおかしいところが有った。
　剣も盾も綺麗に磨かれピカピカしていたが、同時に、ボコボコにされていた。
「完璧だよな‥‥」
　ペルセウスは鏡のように磨かれた剣に自分の顔を映し、愛馬を映し、風景を映し、くっきりとボコボコに映るのを確認した。そして同じく盾にもそれらがくっきりとボコボコに映るのを確認した。
　昨夜彼は、ミルクの波紋に自分の顔がくしゃくしゃと映るのを見て、剣と盾をくしゃくしゃ映る鏡にすれば良いと思いついたのだ。
　メデューサは、美しく、かつ、いやらしい顔と姿態で男を石にする。ならば、美しくも、いやらしくも無い姿にすれば良いのだ。剣と盾をボコボコにしてそれに映せば良いのだ、簡単な話だと気付いた。
「もういいか‥‥きりが無いや‥‥」
　玄関先で何度も点検していて小一時間経っていた。ペルセウスは弱気を振り払い、意を決して突入した。

「誰じゃ？　何者じゃ？」
　奥の部屋から怪しいダミ声が聞こえてきた。
　ペルセウスは押し黙り、奥の部屋ににじり寄って行った。
　盾を前面にかざして前の視界を遮り、剣を横に突き出し、その反射で相手の様子を伺う構えだった。
「え～い！　何者じゃ！　何者なんじゃ！」
　奥に居る者の苛立ちが伝わってきた。
『これは、来るぞ！』
　ペルセウスは身構えた。
「ガラン！」、「ゴロン！」という音が奥から聞こえた。
『しまった、突入すべきだったか‥‥』

　あの音は、槍を手に取ろうとして落とした音に違いない。槍を手にする前に倒したかった。一瞬そう思ったが、
『いやいや、慌てて突入して顔を見てしまったらお終いだ、ここは慎重にしなければ』
　と思い直した。
　しかし、相手が攻撃方法として槍を使ってくれる確率が高いと分かり、ペルセウスは少し安心した。
　ペルセウスが苦手とする相手は弓矢師や投石師、そして魔術師のような遠隔攻撃タイプで、得意とする相手は剣士や槍士、格闘家のような接近攻撃タイプであった。今回の相手が武器として槍を使ってくれるのなら勝算は十分に有ると思った。
「このお！　これでも食らえ！」
　奥の部屋から槍が突き出された。
　ペルセウスはそれを剣で払った。
　槍は剣で切られ、ただの棒切れになってしまった。
『ありゃ‥‥失敗したかも』
　敵の武器を奪ったにもかかわらずペルセウスは後悔した。
　いつもの習慣で思わず相手の槍をなぎ払ってしまったが、せっかく相手が接近戦で挑んでくれたのに、その武器を壊してしまった。相手は魔物だった。次は魔術で攻撃される。そう、気付いた。
「そうか、そういうつもりか。では、わしも遠慮せん。どちらかが死ぬだけじゃ！」
　奥から確信めいた声が聞こえ、ペルセウスは震えた。
『くっ、今日は調子が悪いや、何をやっても裏目に出る。ここは退散すべきか？』
　逃げ腰になり入り口の方に少し戻った時、奥の部屋から人が出てきた。
　ペルセウスはその顔を剣で捉えた。
　剣に映し出された顔は、ボコボコの顔の老婆だった。
「む！」
　ペルセウスが剣を走らそうとした、その時、
「待て！」
　入り口から何者かが飛び込んできた。
　ペルセウスは振り返り、その者の姿を見た。そして驚愕した。
　赤い肌がうろこに包まれ、頭には何匹もの蛇がゆらめき、この世のものとは思えないほど恐ろしい姿の怪物であった。
　驚きのあまりペルセウスの身体は一瞬固まった。
　その隙をついて怪物は液体を飛ばした。
　液体を浴びたペルセウスは急速に意識を失っていった。
　薄れいく意識の中で、
「こやつ、ゼウス軍の刺客か‥‥」
　老婆の声が聞こえた。

「吉報はまだか！？」
　長老が尋ねた。
「はっ！　まだでございます。相手は怪物、簡単にはいかないようです」
　ヘラクレスが答えた。
「早くしてくれぬと身体が持たん。あれからずっと痛みが続いて、わしゃ、死にそうじゃ」
　苦悶で顔をゆがめる長老。
「相手はたかが小娘一人ではないか、簡単な仕事だろ！　早く片付けろ！」
　怒りで顔をゆがめる長老。
　部屋の中を見渡すと、すべての長老が脂汗を流していた。石の状態が続き体力が消耗しているようだ。
「ヘラクレス、追っ手を追加すれば早くケリが付くと思わぬか？　どうじゃ？　増員できぬか？」
　一人の長老が迫った。
「は‥‥残念ながらペルセウス以外の者は全員石になっておりますゆえ‥‥」
　ヘラクレスは答えたが、
「ええ～い！　お前は言い訳ばかり言いおって！　石になっても戦えるじゃろ！　今、お前は石になっておるが、戦う事ぐらい出来るじゃろ、それともお前は、ただの木偶の坊だと言うのか！」
　長老の剣幕は収まるどころか激しさを増していった。
　石になっても戦えるが強さが極端に落ちる。目の前で振り子のように振れる一物は戦う時には邪魔になる。思い切って剣を振ると一物を切ってしまいそうで怖い。下半身の重心位置が一物の揺れで不安定になる。これでは身体を思うように動かす事が出来ない。無理をして戦えば、何とかケリが付くとは思うが、部下が数名失われるだろう。
『痛みぐらい我慢してくれよ、それで死ぬわけでも無いだろが』
　と言ってやりたいが、まさかそんな暴言を吐くわけにはいかない。仕方が無く、
「申し訳ない！　戦略会議の時間が来ました。では、失礼！」
　逃げるが勝ちとばかりにヘラクレスは部屋を飛び出した。
「貴様～、その不誠実な態度は何じゃ！　わしらを馬鹿にしているのか！　覚えておれ！　きっと後悔させてやるぞ！」
　背中に罵声を浴びながらヘラクレスはアテナの研究室に急いだ。

「え！？　何だって？　媚薬だって？」
　アテナの報告を聞きヘラクレスは驚いた。
　ヘラクレスの軍旗に大量の媚薬が付着していたとの報告だった。
「この媚薬は、かなり昔に辺境の地で使われてたみたい。でも、強烈すぎて、使った人の衰弱が激しくって、いつの間にか消えていった薬みたいね」

「どうして俺の旗からそんな薬が出てきたんだよ？　俺は何も知らないぜ」
　そっぽを向くヘラクレスを見て、アテナはクスリと笑い、
「馬鹿ね。あんたの軍旗にはメデューサが振りまいた液体が付着していたの。それが媚薬だったのよ」
　と言った。
　ヘラクレスは舞台前面近くでメデューサの踊りを見ていた。一物が大きくなってからは軍旗を被せ、舞台下でかぶりつき踊りを見ていた。軍旗にはメデューサが振りまいた液体が大量に付着していたのだ。
「そうか！　それで軍旗を貸してくれって言ったのか」
「当たり前でしょ！」
「へへへ、そうだよな。お堅いアテナ参謀長殿のことだ、ちょっと変だなと思ったが、そんな理由だとは想像もしなかったぜ」
　謎が解け、ヘラクレスは照れくさそうに笑った。
　彼は軍旗を貸してから、変な想像が時々脳裏をかすめワクワクしていたのだ。

「とにかくメデューサは、媚薬を使って人を石にしたのよ。怪物じゃないわ」
　納得できる結論を得て、アテナの顔は輝いていた。
　怪物という得体の知れない物を相手には戦略も練りようが無い。相手の正体が只の少女であり、それが媚薬をばら撒いただけと分かり、参謀としての職責を果たせそうだと思った。
「しかし、彼女はどうやってそんな薬を手に入れたんだ？」
　名も知らぬゴルゴンと言う家の末っ子で、今年十八才になったばかりの小娘が、強烈な媚薬を大量に持っていた。腑に落ちない話である。ヘラクレスは首をひねった。
「ゴルゴン家は、今は没落しているけど昔は隆盛を誇った豪族。交易の品々で家中が溢れ返っていたんじゃない？　倉庫に薬が残っていてもおかしく無いわよ」
　アテナは、昔の貴族台帳を指差した。
　その台帳によると、当時のゴルゴン家は、ギリシャと小アジアの交点に縄張りを構え、通行税と称して商人達から多額の金品を巻き上げていた。そして、得た金品で蔵が溢れていたようである。
「通行税かい、かなり昔の話だな」
「ええ、ゼウス様によって廃止された、あの税金‥‥」
　ゼウスは独善的な男だが、町の発展の為に心血を注いだ。
　独善的なゆえに悪い結果を招く事も有ったが、良い結果を得る事も有った。
　通行税を廃止したのは良い結果を生んだと人々は評価している。それによって交易が盛んになりゼウスの町が世界の中心になったからである。
「て、事は、ゴルゴン家はこの町に恨みを抱いてるって、考えられるよな」
「ええ、そりゃ、通行税が廃止されてからゴルゴン家が没落したんだから、当時は恨んだでしょうけど‥‥今はどうかな？　随分昔の話だし‥‥」

「いやいや、復活したなら恨みは消えるが、没落したままじゃ恨みは消えないぜ。もしかして今回の事件は、メデューサー人の仕業じゃなく、ゴルゴン家が仕掛けてきた復讐‥‥そう思わないか？」
「う～ん‥‥だけど、媚薬を振り撒いただけでしょう。それがゴルゴン家の復讐だって言うの？　私にはメデューサの悪戯ぐらいにしか思えないわ」
「媚薬を振り撒いただけだって？」
「そうでしょ？‥‥」
「いや、ちょっと待て‥‥」
　ヘラクレスは何かを思い出した。
「そういえばメデューサは、別のビンを取り出してその中身を振り撒こうとしてたな。俺が阻止したら、「締めが残ってる！」と喚いた。最後に撒こうとしたのは毒薬かも知れない。‥‥あのビンの形はそれまでとは全然違っていたぜ‥‥」
　最後にメデューサは今までと違う形のビンを胸元から取り出した。
　ヘラクレスはそれをしっかりと見ていたのだ。
「え！？　そんな事があったの！？　もし別の薬を撒こうとしたのなら、単なる悪戯って考えるのは甘いかも知れないわね。ヘラクレス、あんたの言う通りゴルゴン家の復讐の線も有るわね」
「あ～、しまったな‥‥メデューサー人を退治すれば終わると思ったが、ゴルゴン家を退治しなきゃいけないって事だ。ペルセウス一人じゃ無理だったよな‥‥」
　ヘラクレスは両手で頭を抱え込んだ。
「おまけに、「石になるから姿を見るな」なんてアドバイスしちゃったし」
　アテナの追い討ちに、
「あ～‥‥参った‥‥」
　机に顔を伏せてしまった。

「右！」
　アテナが右手を振ると、右翼の陣が動いた。
「左、戻れ！」
　アテナが左手で手招きすると、左翼の陣が戻ってきた。
　今、ゼウス軍はメデューサの家から距離を置いた所に陣取っている。
　注意すべきは風の流れ、すなわち、毒薬が撒かれても大丈夫な態勢に構える事なのだが、この地では風を読むのが難しい。オリンポス山からの吹き降ろしやエーゲ海からの海風が頻繁に切り替わるうえ、時々、頭上から渦巻く風が降りて来た。
「なあ、アテナ。面倒だから火矢でも仕掛けないか？　待っていても風は止まないぜ」
　ヘラクレスは焦れていた。敵を目の前にして待機するのは性格的に合わなかった。
「馬鹿な事を言わないで。中にペルセウスが居たらどうするの」
「そうか‥‥だったら石でも投げないか？　うまくいったら家が壊れて中の様子が丸見えになるぜ」
「ふ〜ん‥‥良いアイデアね‥‥」
　アテナはヘラクレスの顔を立てるため、取り敢えず感心してみせたが、
「でもね、家を壊すほど大きくて勢いが有る石って、ペルセウスに当たったら危ないでしょ。やっぱり、じっくり待ちましょうよ」
　とヘラクレスをなだめた。
　アテナは空を見上げ雲の流れを見詰めていた。上空では相変わらず風が渦巻いており、雲がバラバラの方向に動いていた。
　暫くして伝令が駆け寄り、
「アテナ様、右翼からの報告です、ペガサスを発見しました。井戸の傍につながれていたそうです」
　と告げた。
「確かにペガサスか？」
「はい。間違い無いとの事です」
「そうか‥‥」
　ペガサスはペルセウスの愛馬である。美しい白馬で、放っておけば天まで駆け昇るとまで言われるほど、足が速くスタミナの有る馬だった。
『ペガサスが此処に居ると言うことは、やはりペルセウスも‥‥』
　アテナはヘラクレスに、
「中にペルセウスが居る。攻撃は仕掛けるな」
　とあらためて命じ、それから右翼の陣を引き上げさせた。
　アテナは依然、空を見上げ風向きを読んでいた。時々、草をちぎって投げ、地上付近の風向きも確認していた。
　ふと、風が冷たくなった。
　アテナはハッとなり、左手にあるオリンポス山に注意を払った。

　山頂付近に雲が降りていた。
『来たか』
　もうすぐ山頂から麓に向かって強烈な吹き降ろしが始まる。
　その風とエーゲの海風、そして偏西風が合わさって、ゼウス軍はメデューサの家への追い風を長時間得るだろう。この風なら毒薬を恐れなくて良い。メデューサの家で毒薬を撒かれてもこちらの方に流れて来ない。
　アテナは、
「もうすぐ強い風が吹き出す。私の合図で突入して下さい」
　ヘラクレスに指示を出した。
「お！　待ってたぜ！」
　背中の剣を抜き、柄をギュッと握り締め、ヘラクレスは大きな力こぶを作った。
　待ち続けて冷えて固まった筋肉を暖めるかのように、力こぶを膨らませては緩める作業を幾度も繰り返した。
「よし！、行け！」
　アテナの号令と同時に、前衛、左翼、右翼の三部隊が一斉に突進した。
　それを見てアテナも続いた。
　先行している三部隊はいずれも走力の有る隊員で構成されている。アテナは徐々に遅れていったが、特に指令変更が無いので黙って先行を許した。
『後方の部隊はどうなっているか？』
　後を振り返った時、とんでもない光景が目に映った。
　黄色い煙が後方から迫って来た。
　後方部隊は煙に呑まれ、その姿は見えない。
「中止！　皆、山に登れ！」
　アテナは先行部隊に大声を投げた。
　だが、距離が有りすぎた。声が届かない。
　先行部隊は行程の半分をすぎていた。このタイミングだと、彼らはメデューサの家に突入して数秒後に煙に飲み込まれる。
「やめろ！　山に登れ！」
　走りながらアテナは道端に落ちている石を拾っては先行部隊に投げつけた。もはや走って追いつくのは無理だった。
　煙はアテナの背中目掛けて真っ直ぐに迫ってくる。
　もうすぐ煙の一部がアテナに襲い掛かるだろう。
「山へ‥‥」
　手を振りながら大声で叫ぼうとしたが、息が切れ声が出なかった。
　いつしか歩みは止まり、その場に立ち竦んでいた。

　後方から石を投げつけられ、敵襲かと驚いた隊員が数名居た。彼らは一瞬立ち止まり辺りの様

子をうかがったが、敵の姿が見えなかったので突入を再開した。
　ヘラクレスは石には気付かなかったが、数名の兵士が一瞬立ち止まり辺りを見渡すというおかしな動作をしたので、自分も同じように辺りを見渡してみた。そしてアテナの異変に気付いた。
「どうしたんだ！」
　呆然と立ち竦んでいるアテナは異常だった。
　ヘラクレスは両手を広げ、前衛部隊に停止を命じた。
「どうしたんだ！」
　もう一度アテナに向かって大声を投げかけた時、ヘラクレスの目に黄色い煙が迫ってくるのが見えた。
「いかん！」
　ヘラクレスは右手で山を指差し全員にオリンポス山に向かうよう指示を出した。
　そして自身も山に向かおうとしたが、アテナがへなへなと崩れる姿を見て、彼女に駈け寄り背中に背負った。
「しっかりしがみつけよ！」
　背中に声を掛け、ヘラクレスは一目散に走り出した。
　途中で黄色い煙に呑み込まれたが、息を止めながら煙の層から脱出した。
　そしてなんとかオリンポス山の麓に辿り着いた。
　振り返ると黄色い煙は消えていた。
　何人もの隊員が倒れているのが見えた。
　後衛部隊は守備位置で全滅していた。逃げる暇も無く煙に襲われたのだろう。それに引きかえ、突入していた部隊の大半は無事だった。アテナがいち早く気付いて知らせたからである。
「心配するな、まだまだ戦えるぜ」
　ヘラクレスが声を掛けた。
　アテナは応える気力を失い、目を閉じ、うな垂れ、黙り込んでいた。

　空が澄み渡っている。
　寝転んで眺めていると、星々がまたたき、何か話し掛けてくるように思えた。
　当時のギリシャでは、人は死して星になり、天上の世界から人々を見守ると信じられていた。星がまたたくのは何か伝えたい事があるのだと云われており、人々はその言葉を理解しようと努めた。
　銀河が南北に流れ、明るい夜空を東と西に分断している。
　分断された西の方はオリンポス山が覆い被さり漆黒に塗り込まれている。それに引き換え東の方は、月や星の光がエーゲ海に反射して、空も海もきらきらと輝いていた。
　ヘラクレスは柔らかい草が生い茂った場所で平らな岩を枕にして銀河を見詰めていた。
　今まで死んでいった人の数と同じなのだろうかと、星の数を数えていたが、何度数えてもチカチカとしたまたたきに惑わされ、振り出しに戻ってしまう。数え疲れたヘラクレスは、目をぱちぱちとさせてから、深い溜息をついた。

　思えば十二歳で初陣を経験し三十五歳になる今まで、数多くの戦いに参加してきた。その間に殺した敵の数、殺された仲間の数は相当数にのぼる。その数も数え切れぬのに、参加しなかった戦いで死んでいった人の数、それも、知りもしない世界や時代の分まで数えるのは無謀だと悟った。
　数え切れない人々が死に、天に昇り、美しい星空を作った。
　明るく輝く星は華やかで目立っているが、微かに光る星々も寄り合って輝きを増幅しながら美しい形を作っている。星が密に集まっている部分は賑やかで目を引くが、小さなまたたきがポツンと寂しい部分にも心引かれる。どこにも無駄な光は無い。全ての光が調和してこの美しい星空が出来ている。自分が星空の何処に配置されるのか、生前には分からないが、この美しい星空なら何処に配置されようが不満は無いとヘラクレスは思った。

「皆、復活しましたよ‥‥」
「えええ～、なんと！」
　アテナの声で目が覚めた。
　ヘラクレスはいつの間にか眠り込み、夢の中で活劇の主人公を演じていた。
　単身で敵の本拠地に乗り込み、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、絶好調の活躍をしていたのだが、いくら倒しても敵が沸いてくる。いい加減にしてくれないかなと、うんざりしていたところだった。
「え？　復活？　何？　何が起こったんだ？」
　よもや敵が復活して、振り出しに戻ったのではあるまいな？
　嫌な予感がヘラクレスを目覚めさせた。
「皆、無事だったのですよ」
　アテナが笑いながら声を掛けた。
　どんな夢を見ていたのか知らないが、寝ぼけて大慌てしているヘラクレスは笑えた。
「あ、アテナか‥‥」
「いい夢見てました？」
「どうかな‥‥」
「起こしてしまったなら、ごめんなさい。皆が無事だったので‥‥」
「皆って？」
「昨日、黄色い煙で倒された仲間ですよ」
「煙？‥‥」
　ヘラクレスは暫く首をかしげていたが、
「おお～、そうだ、思い出した。煙に襲われて散々な目に遭ったんだ」
　と手を打った。
「そうか、皆、無事だったのか」
「ええ、誰一人後遺症も無くって」
「そいつは良かった。アテナ、本当に良かったな」

　ヘラクレスはアテナに白い歯を見せた。
　昨日の惨敗後、彼女はひどく落ち込んでいた。ヘラクレスがどんなに声を掛けてもまともな返事をしてくれなかった。それが今では憑き物が落ちたかのように晴れやかな顔をしている。仲間達が無事だったのは当然嬉しいが、それよりアテナが元気を取り戻したのが嬉しかった。
「アテナ、疲れていないか？　交代しようか？」
　ヘラクレスは立ち上がり、自分の場所を譲ろうとアテナに手を差し伸ばした。
　エーゲ海に昇る朝日がアテナの顔を照らしている。
　色白の顔が真珠のように美しく輝いていたが、心なしか青ざめて見えた。
「大丈夫、疲れていないわ」
　アテナはそう答え、ヘラクレスの手を握ったままじっとしていたが、暫くして、
「ありがとうヘラクレス、心配かけてごめんね」
　とつぶやいた。
「なんの‥‥」
　ヘラクレスは短く応え、アテナの手を両手で包んだ。
　大きな手から温もりが伝わる。
　あまりにも暖かいので、アテナは自分の身体が冷え切っているのを知った。
　夏とはいえこの地域の夜は冷える。そんな中で夜通し看病をしていた身体は疲れ、冷え切っていた。
「もう、休めよ‥‥」
　ヘラクレスが言った。
「もう少し‥‥」
　アテナが答え、そのまま二人はじっとしていた。
　その時、
「お～！、ヘラクレス殿、ご無事でしたか！」
　突然の大音声が雰囲気をぶち壊した。
　声の主はアトラス。タイタンという巨人一族の出身で、現在はゼウス軍の後衛を任されている将軍だった。

　敵は元豪族、今は民間人の集まりだと聞いていた。
　後衛部隊の周りには高さ一メートル以上の草が生い茂っており、敵が潜んでいる可能性があった。だが、屈強な武装兵に飛び掛る民間人など居ない、民間人に出来る事は遠くからボーっと眺めるぐらいだろうと思っていた。
　アトラスは周りの警戒をほどほどに、アテナの一挙手一投足を注視していた。突入の合図が出たら間髪入れずに続き、たまには敵を打ち倒してみたいと思っていた。
　アテナの手が上がり、突入が秒読みに入った。
　手が振り下ろされるのはもう直ぐだ、アトラスだけでなく後衛部隊の意識はアテナの動作に集中した。数秒後、アテナの手が下ろされ前衛部隊が突入し、続いてアテナも突入した。アトラ

スは、「行くぞ！」と怒鳴りながらそれに続いた。その時、黄色い煙が襲ってきた。後衛部隊は煙に包まれてしまった。
「いやぁ～、面目ない。まさか背後から煙で攻撃されるとは思わなんだ」
　アトラスは、頭を掻き掻き平身低頭謝った。しかし、アテナは不機嫌そうに、
「私は、何処から毒薬が撒かれるか分からない、気を付けて下さいと言いました。覚えていますか？」
　とアトラスを睨んだ。
　垂らした頭をさらに垂らし、「ハハッ！」とアトラスは返答したが、アテナは、
「それに、民間人だから無害だなんて、そんな甘い考えで今まで戦っていたのですか？　私が慎重に風向きを読んでいたのは、油断できない相手だと思ったからです。後ろから私を見ていて、気が抜けたように見えましたか？」
　と追い討ちをかけてきた。
　アテナはかなり機嫌が悪い、
「今回は睡眠薬だったけど、もし毒薬を撒かれていたら後衛部隊は全員死んでいたのよ。そうなったら、貴方はどう責任取るのよ！」
　アトラスへの攻撃は収まる気配が無かった。
　縮めた身体をさらに縮ませ、アトラスはヘラクレスの方をちらっと見た。
　‥‥ヘラクレス、何とかしてくれよ‥‥
　目が訴えていた。
　巨大なタイタン族の中でも最大級のアトラスが、借りてきた猫のように縮こまっている。態度を見る限り今回はかなり反省しているように見える。これ以上責め立ててどんな効果があるのだろうか、ヘラクレスは、
「なあ、アテナ。アトラスも十分反省しているし、もう勘弁してやれよ」
　と助け舟を出した。
「ふ～ん‥‥隊長殿は、お優しいですね。どんなに失敗をしても、親友のした事なら許しちゃうんだ」
　アテナはヘラクレスの方に向き直り、皮肉たっぷりに応えた。
「そう言うなよ。アトラスだってたまには失敗するさ。許してやれよ」
「なにが、たまによ！　しょっちゅうじゃない！　遠征の度に失敗してるわ。その度に何人もの部下が死んでるのよ」
　アテナの怒りが燃え上がる。そして、
「だいたい、貴方が甘いからアトラスが全然反省しないのよ。本来なら、隊長の貴方が注意するのが筋でしょ！」
　怒りの矛先がヘラクレスに向いてきた。
『‥‥参ったな‥‥』
　こんな時、何を言っても怒りを増幅させる。
　ヘラクレスはうなだれたまま黙り込んでしまった。

　アトラスとヘラクレス、この二人の大男が並んでうなだれ縮こまっている。まるで、母親に叱られ立たされている大きな子供達のようだ。
　アテナは二人を睨み付け、二人はしょんぼりと立ち尽くす。
　その時間が暫く続いた。やがて、
「は～‥‥もういいけど‥‥」
　アテナは溜息を付きながら、
「まるで、私が悪人のようだわ」
　と手を振って二人を解放した。
　兵士達が遠くからこちらの様子を見ていた。
　アテナは彼らの視線が気になったのだ。

　黄色い煙の発生場所が分かった。
　アテナの分析によると、粉状の薬剤Ａが散布された場所に、液状の薬剤Ｂが流し込まれて化学反応により煙が発生した。薬剤の正体は分からないが、反応漏れした二種類の薬剤が残留していたとの事だった。そしてその痕跡を残す場所は、後衛部隊の最後尾から五、六十メートル程の位置にあった。
「ここから煙が発生して、後衛、前衛、メデューサの家に流れて行ったのか‥‥」
　ヘラクレスはその場所に立ち、煙の流れた先を見つめた。
「おいおい、あんなに遠いんだぜ。こんなところから煙を撒いて、あそこを狙えるのかよ？」
　メデューサの家まで二キロメートル以上あるように思えた。
「私も不思議に思うの。ここから煙を出しても、途中でいろんな方向に風向きが変わるし、最悪、風向きが逆転したら自分が煙に巻かれるわ。普通、そんな無謀な事をするかしら？」
　アテナも首をかしげた。
「本当にここからあそこに薬が撒かれたのか？」
　二人は改めて、メデューサの家の方を見つめた。
　大きな枯れ草の塊が風に吹かれて、ぴょんぴょんと小さく跳ねたり、くるくる回りながら空高く昇り、それからストンと地に落ちたり、何だか楽しそうに動き回っている。遠ざかったり近づいたり、右に行ったり左に行ったり、落ち着きの無い動きをしている。
『これは難しい風だなあ‥‥』
　ヘラクレスはメデューサの家を指差しながら、
「お前ならここから煙を撒いて、あそこを狙う事が出来るか？」
　とアテナに聞いてみた。
「昨日は五時間待って、やっと一度だけ長い追い風が続いたわ。めったに無いタイミングだけど、そのタイミングで煙を撒けばオッケーね。時間さえあればきっと出来るわ」
「え？　五時間待って、やっと一度だけ？」
「そうよ。昨日の場合五時間の間で、そのタイミング以外だと、メデューサの家どころか前衛にすら届かなかったと思うわ」

そんな難しい風を敵は読んだのか？
敵はアテナ並みの能力を持っているのか？
ヘラクレスは、「う～ん‥‥」と腕組みをした。
すると傍らで全ての会話を聞いていたアトラスが、
「わし、何だか全部わかったような気がする」
と、突然言い出した。
「ええ～‥‥嘘だろ？」
「いや。考えてみれば、わしにも風が読めたかも知れんわ」

翌日、ゼウス軍は再び同じ場所に陣取った。
昨日は夕方までの自由時間が有り、それからキャンプファイヤーで飲み食いを楽しみ、しっかり睡眠を取ったので、隊員たちは元気溌剌だった。
「よし！、今日は頑張ろうぜ！」
ヘラクレスの掛け声に全員、拳を振り上げ、「オー！」と応えた。
「行くわよ！」
アテナは右手で合図を送り、右翼の部隊を右に回り込ませた。次に左手で合図を送り、左翼の部隊を左に回り込ませた。この前と同じ作戦のようだった。
今日も厄介な風が吹いている。いくつかの枯れ草の塊が、飛んだり跳ねたりしている。お互いにぶつかり離れ、ぶつかり離れ、まるで格闘技をしているようだ。
「ペガサスが井戸の傍につながれていました。枯れ草の塊が近づく度に興奮して、きっと、お腹をすかせているのだと思います」
偵察兵の報告を聞き、
「う～ん‥‥その報告がなんの役に立つと言うのか、私にはさっぱり分からないわ」
アテナは首をひねった。
毒が含まれている言い方だった。
「はは～！、もう一度行って参ります」
偵察兵は顔を赤らめ、慌てて飛び出して行った。
彼は今年入隊したばかりで、年の頃なら十五、六。少し頼りないところがあった。
「ねえ？、私って、嫌なやつ？」
「いや。今のは内容が浅いし、感想を述べた感もあるし、叱られて当然だな」
「そう、良かった。‥‥でも、できれば貴方から注意して欲しいわね」
「ははは‥‥」
力なく笑いながら、ヘラクレスは横に立っているアテナを見詰めた。
きりっと口を結び、真っ直ぐ前を見据えたその表情は、「知恵の女神」とあだ名されるに相応しい聡明感が漂っている。バランスのとれた身体に、白い肌と輝く金髪、「美の女神」とあだ名されるに相応しい美しさを誇っている。そして、ゼウス軍の参謀長として数々の手柄を立てた実績は、「戦いの女神」とあだ名されるに相応しいものであった。
‥‥俺は、どうなんだろうな‥‥
ヘラクレスも手柄の数には自信があった。
十二歳の初陣でタイタン一族と戦った。その時、一つ年上のアトラスと一騎打ちをして、一日中戦っても決着が付かなかった。双方の陣営は途中から二人の健闘に見惚れ、戦いを中断して応援合戦をしていた。おかげで死傷者が少なくて済んだ。最終的には、タイタン一族はゼウス一族に併合されたが、ヘラクレスとアトラスの功績は大きく評価された。
それ以降、ヘラクレスは功績を積み重ねていった。
平民の出だった彼が軍の隊長になるという異例の出世を遂げたのは、功績の多さからである。
‥‥だが‥‥

　アテナの前ではそんな程度では物足りないと感じてしまう。
　もって生まれた身体能力の高さで敵を粉砕する事は出来ても、犠牲者を出さないよう味方を指導する事が出来ない。
　指揮はアテナに任せ自分は戦いに専念したいと昔は思っていたが、隊長になってしまった以上、部下の命に責任を持たねばならない。それがうまく出来ない自分を不甲斐なく感じていた。

「そろそろね‥‥」
　アテナがささやいた。
「お！、そろそろか」
　ヘラクレスは身構えた。
　周囲に緊張が走った。
　アテナが手を上げ、そして、振り下ろした。
　前衛部隊が突入し、続いてアテナ、そして後衛部隊が突入を開始した。
　その時、後衛部隊の後方で黄色い煙が発生した。
　煙は後衛部隊に迫ってきた。
　もう少しで後衛部隊の最後尾が呑み込まれる、という時、風向きが逆転した。
　煙は逆方向に流れを変えた。
　そして、煙が発生した場所に戻り、そこで停滞した。

「おい、起きろ」
　ヘラクレスが声をかけた。
　目の前には、婆さんが一人、顔中を腫らしている女が一人、そして、ペルセウスが倒れていた。
　真っ先に目を覚ましたのは、婆さんだった。
「ふ〜‥‥、ここは何処じゃ？」
「ゼウス軍だ」
「‥‥そうか、ゼウス軍か‥‥」
　婆さんは観念したかのように目を閉じたが、すぐにカッと見開き、
「わしを騙したのか！」
　とアテナを睨んだ。
「ごめんね」
　アテナは微笑みながら軽く頭を下げた。
　実は昨日、アトラスがヒントをくれたのだ。
　アトラスは後衛部隊の真ん中に居て、ずっとアテナの采配を見ていた。
　アテナはメデューサの家に向かう強く長い追い風を待っている。
　きっと彼女はその風を当てるだろう。
　それに乗って我々は突入する段取りだった。

一方、敵は、ゼウス軍のさらに後方に位置し、追い風を待っていた。
つまり、ゼウス軍が欲するのと同じ風を待っていた。
敵はその風を読んだのだろうか？
いや、自分で読まなくても良い。
アテナの読みに任せたほうが確実だ。
アテナがその風を読み、突入を命じた瞬間こそ、毒薬を撒くべき瞬間なのだ。
敵はきっとアテナの動きを見て煙を撒いたに違いない、とアトラスが言った。
そこで一計を案じ、暫くは後方から前方に流れるが、その後逆風に転ずる風を読むことにした。その風で煙を撒かせて、逆風によって自滅させようとしたのだ。
「ふふふ‥‥かわいい顔して、やってくれるのぉ‥‥」
婆さんは、うんうんと頷いたあと、
「さあ、こうなったらどうでも良い。煮るなり焼くなり、好きにしろ」
と仰向けに倒れてしまった。
「参ったな‥‥」
見事な居直りにヘラクレスは困惑した。
年齢は八十を超えているだろうか、目をつぶれば、目なのか皺なのか見分けが付かなくなるほど顔中に深い皺がある。両手両足を思い切り広げても、小さくやせ細った身体が大きく見えるはずもない。こんな愛すべき婆さんを、煮たり焼いたりいたぶる事など出来るはずは無かった。
「なあ、婆さん、教えてくれ。何故、俺達とあんた達が戦う羽目になったのか。メデューサはどうして媚薬を撒いたのか。分からない事が沢山あって、いろいろ聞きたいんだが、順を追って教えてくれないか」
ヘラクレスは仰向けの顔に向かって、懇願するように話しかけた。
仰向けの顔は目を閉じたまま、何も答えなかった。
固く結ばれた口元は、何も答えぬという強い意思を表していた。
「私が答えます」
傍らから声がした。
いつの間にか顔を腫らした女が目を覚ましていた。

ゼウスの通行税廃止がゴルゴン家の没落の原因では無かった。
ゴルゴン家は通行税収入で潤っていた。しかし、ゴルゴン家に通行税を払ってもニコニコと関所を通過していく商人達の方が潤っているように見えた。事実、通行税以外にもお礼だと言って珍しい物品を置いていく商人も居り、彼らにとって通行税など、はした金に過ぎないと思えるようになった。
彼らの土産に目を丸くしている自分達は彼らより貧しいのだと、当主は考えた。
そんな時、通行税が廃止された。
ちょうど良い機会である、当主は商売人になると決めた。
東の方には「インダス」と呼ばれる地域が有る。そこで採れる香辛料はギリシャでは高値で取

引されている。
　さらに東の方に行くと「コウガ」とか「チョウコウ」とか呼ばれる地域が有る。そこでは丈夫で美しい土器が作られている。
　そしてさらに東に行くと、海上に沢山の島が集まった「ワ」と呼ばれる地域が有る。そこでは金銀、サンゴが沢山採れるという。
　どうせ行くなら、大きく行こう。
　当主は三人の息子と多くの従者を引き連れて「ワ」を目指した。ゴルゴン家の資産の大半は、ギリシャの貨幣より高値になると云われているオリーブに換えて持って行くことにした。一年もすればそのオリーブが金銀サンゴになって戻ってくる予定だった。
　ところが、待てど暮らせど彼らは戻って来ない。
　残された女達は、男手無しで十八年間、必死に家を守ってきたのだ。
「お婆ちゃんはずっと苦労していたわ。私もお手伝いしていたんだけど、結局は迷惑掛けちゃったかな」
　と女が言った。
　顔中が腫れていて、ところどころに肌のひび割れがあり、髪の毛も縮れて絡まりあって、まるで頭に蛇が生えているように見える。
　本人は自分がメデューサだと言っているが、あの美貌の片鱗は残っていなかった。
「本当にメデューサなのか‥‥物凄い変り様だな‥‥」
「本当よ。コンテストの日から、顔が腫れてきて‥‥。とうとう、こんな顔になっちゃった」
「そうか‥‥痛そうだな」
「めちゃくちゃ痛い。少しはましになってきたけど、まだまだ痛くて痛くて‥‥」
　メデューサは答えながら、顔をゆがめた。
　口元のひび割れが大きくなり血が噴き出した。
「もう良い、お前は休め。‥‥なあ婆さん。代わりに答えてくれるか？」
　ヘラクレスは依然仰向けでひっくり返っている婆さんに声を掛けた。
「ああ、いいぞ」
　婆さんが続きを話し出した。

　当主は必要最小限の金しか残さなかった。
　沢山のオリーブを持っていけば、より沢山の財宝に化ける。家に残すのは一年分の金で十分だと言った。
　それで、婆さん、嫁、三人の孫娘は倹約生活に入った。
　予定の一年が過ぎ、二年目も乗り越え、そして三年目、金が無くなった。
　嫁は農園に働きに出、婆さんが三人の孫娘の世話をすることになった。
　しかし、良家の出だった嫁には農園での労働は体にこたえた。体調を崩して入院を余儀なくされた。
　今度は婆さんが働く番だ。幼い三人の孫娘を抱えて働かなくてはならない。

‥‥今のわしに出来る事‥‥
　婆さんは考えた挙句、関所を復活させた。
　関所の前で仁王立ち、「おい、お前たち、此処を通りたくば、金をいくらか置いてゆけ」と、幼いメデューサを背負い、二人の孫娘の手を引いている小柄な婆さんに商人たちは、ニコニコとお金を支払い、「婆さん、頑張れよ」と手を振って関所を通過するのであった。
　もちろん、通行料は今までのような高額では無かった。小遣いに毛がはえた程度の金額で、商人達は施しのつもりだったのかも知れない。それでもゴルゴン家にとっては、つつましくすれば何とか暮らしていける金額になった。
　数年経ち、孫娘たちは立派に成長した。三人とも美しく、それでいて心根の優しい女性になっていた。
　しかし、今年になって不幸が起きた。入院中の嫁の容態が悪化したのだ。

「高価な薬が必要なんじゃ‥‥」
　婆さんは表情を曇らせた。
「いったい、いくら掛かるんだ？‥‥」
「大判、五百枚」
「五百枚！‥‥」
　ヘラクレスは目を丸くした。
　大判五百枚といえば、一般家庭で五年は食っていける。つつましく暮らしているゴルゴン家なら、十年は食っていける金額だろう。
「わしらは、必死になって金を作ろうとしたんじゃ‥‥」
　一番上の孫娘はトロイアの町に、二番目の孫娘はクレタの町に、それぞれ出稼ぎに行った。
　そして婆さんは、通行料を値上げした。
　支払いを拒否する商人が増えたので、倉庫から武器を調達して、メデューサと二人、手荒な徴収をしだした。
　剣や槍、弓矢に吹き矢、そして倉庫の片隅に眠っていた薬剤。いろいろ使った。
　ゼウス軍を苦しめた睡眠薬もその一つで、これは大商団相手に役に立った。
　そんな中、奇妙な薬が見つかった。
　男にしか効かない媚薬と、それの解毒薬であった。
「使い道はあると思うか？」
　婆さんの問いに、
「興奮されてもなぁ‥‥」
　メデューサが低い評価をしたので、その薬は一旦封印された。
　が、
　‥‥美人コンテスト！　今年の優勝賞金は、大判五百枚！‥‥
　このポスターを見た時、婆さんは、神からの啓示が降りたと思った。

踊りが巧いメデューサにとって、踊りながら薬を撒くなど簡単な事だった。
‥‥髪に薬を振り掛けて、髪をふりふり周囲にばら撒く‥‥
メデューサの考えた振り付けだった。
まずは激しい踊りと共に媚薬を振り撒き、「エロス」の点を稼ぐ。
次に、静かな踊りと共に解毒薬を振り撒き、「知性」ならぬ「知静」の点を稼ぐ。
興奮したり鎮まったり、何だか不思議な気分になれば、「神秘」の点も入る。
これで優勝できる、と思った。
賞金の大判五百枚が手に入る、と思った。
でも、途中で中断させられた。
それも最悪のタイミング‥‥
解毒薬を撒く前だった。
「婆ちゃん、大変な事になっちゃった‥‥」
「分かってる、わしも見に行ってた‥‥。こうなったら仕方が無い。戦争じゃ！」
ゼウス軍と戦う決心をし、戦に備えて大量の薬剤を準備した。そして、
「メデューサ、お前は避難しろ」
と振り返った時、メデューサの顔が真っ赤に腫れ、髪の毛もチリチリに縮んでいるのが目に入った。
「痛い！」、「痛い！」、と顔を押さえているメデューサ。
それを見て、「メデューサや！」、「メデューサや！」とおろおろするだけで、何もしてやれぬ老いぼれ。
もしかして、倉庫の薬剤の中で何か役に立つ物があっただろうかと考えたが、傷を癒す薬など何も思い当たらない。害をなす薬にしか興味がなかったからだ。
「あ〜、馬鹿だ‥‥わしゃ、大馬鹿だ〜‥‥」と反省しても、メデューサの悲鳴は大きくなる一方。
一晩中メデューサに手をつなぎ、「わしを許してくれ、わしを許してくれ‥‥」と繰り返していたら、
「婆ちゃん‥‥、生きてる？」
メデューサの声がして、
「メデューサ、大丈夫だったのかい？」
目を開けたら、目の前にメデューサの顔があった。
痛々しい顔じゃった。
びび割れだらけで血まみれの顔じゃった。
「お前は、そんな顔になっても、わしの心配をするのか‥‥」
と聞いたら、
「だって、お婆ちゃんがずっと私の傍に居てくれて、今の私があるんだもん」
と、言ってくれた。
‥‥‥‥‥

婆さんの目から涙が溢れていた。
震える唇を必死で結び、嗚咽をこらえていた。
ヘラクレスは、
「婆さん、大変だったな。けど、よく頑張ったと思うぜ」
と、声を掛けた。
婆さんは、顔を歪めながら、「ずず～」っと鼻水をすすった。

「アテナ、メデューサの身に何が起こったか分かるか？」
ヘラクレスが尋ねた。
アテナは、
「そうね、話を聞いた限り、薬にかぶれたんだと思うけど、診ないと分からないわね」
と答え、「ちょっといいかな？」、メデューサの顔の診察を始めた。
ヘラクレスはその様子を眺めていたが、ふと、或る物に気付いた。そして、
「そういえば、そこのそいつは、何故そこで寝ているのだ？」
と、男を指差した。
男は液体が入ったビンを握り締め、うつ伏せになって寝息を立てていた。
「そこのそいつ」と言った瞬間、ピクッと身体が動いたのを見て、ヘラクレスは、
「おい、ペルセウス。起きてるんだろ、シャキ！っとしろ！」
と一喝した。
倒れていた男は、
「はい！、ペルセウス、只今起きました！」
と起立し敬礼した。
「説明しろ」
ヘラクレスの命令に、
「はい！、私は、残念ながら囚われの身になりました‥‥」
と語りだした。

ペルセウスは数日前、ゴルゴン家に攻め入って、戦いの末、薬で眠らされた。
目が覚めた時、自分の身体がベッドに寝かされ鎖で拘束されているのが分かった。
横を向けば直ぐ傍に婆さんが居て、うつらうつら船を漕いでいる。
『ああ、この婆さんは、ボコボコの剣に映った婆さんだ。へ～、こうしてちゃんとした顔を見ても、ボコボコに映った顔とあまり変わらないもんなんだ』
妙な感心をしていると、部屋に誰かが入って来て、
「目が覚めた？　気分はどう？」
と聞いてきた。
入口に頭を向けているので姿は見えないが、声から若い女性であると分かった。
「はい、大丈夫です。‥‥あのぉ、鎖を解いてくれませんか？　帰らなくっちゃ」

　そう言ったら、女は、
「だめよ、あんたゼウス軍でしょう。帰すわけにはいかないわ」
　と冷たく答えた。
「それにあんた、私を殺しに来たんでしょ？」
「え？　メデューサ？」
「そうよ」
　これは、いけない。
　メデューサの妖艶な顔を見たら石のようにされてしまう。
　仰向けで寝かされているのだ。この姿勢で石のようにされるのは恥ずかしい。
　思わず、
「近寄るな！、あっち行け！」
　と叫んだ。
「ふ〜ん‥‥。そんな事、言うの‥‥。じゃ、近寄ろうっと」
　女は足元に移動してきた。
　目をつむり、何も見まいとしたが、しつこく、しつこく、「こちょ、こちょ」と足の裏をくすぐられ、
「やめろ！」
　と睨んだら、
　驚いたのなんのって、目に飛び込んできた女の姿は、妖艶どころか、その真逆。
　思い出したぞ、こいつは、薬を振り掛けてきた奴だ。
「はぁ〜‥‥メデューサと違うじゃないか」
　なぜかホッとした。
「別に信じて貰わなくてもいいけど、私はメデューサよ」
「本当に？」
「本当よ」
　‥‥
　それから、美人コンテストでの出来事や、顔が腫れた話を聞いた。
　可哀相だなと思っていたら、婆さんが、
「こやつの処分は後で考える。それより、もうすぐゼウスの大軍が押し寄せて来るぞ。メデューサ、毒薬の準備だ」
　と、話に割り込んできた。
「やっぱり毒薬を撒くの？」
「当然じゃ。奴らを皆殺しにしなければ、わしらが殺される」
「仕方ないか‥‥」
　二人は出て行こうとした。
「ちょっと待って！　毒薬を撒くって、それだけはやめて！　お願いします！」
　大声で懇願したけど、

婆さんには、「うるさい」と頭を叩かれ、メデューサには、「じゃぁ、後でね」と頭を撫でられ、二人とも聞き入れてくれなかった。
もう一度、
「お願いします！　手伝いますから、毒薬じゃなく、睡眠薬にしてください！」
とお願いしてもダメだった。二人は部屋から出て行った。
ところが数分後、
「いや～、参ったのぉ」
婆さんが部屋に戻ってきて、
「おい、小僧。お前は、睡眠薬なら手伝うと言ったな。あれは本当か？」
と聞いてきた。
「はい、言いました。睡眠薬にしてくれるのなら、喜んで協力します！」
「分かった。お前の希望どおり毒薬は止めといてやる。だから、協力しろよ」
‥‥
このような理由で、ペルセウスは婆さんたちに協力しているのだった。
「なるほど‥‥。ペルセウス、お前が毒薬散布を止めてくれたのか。礼を言うぞ」
ヘラクレスがペルセウスの手を握った。
「いやぁ～、婆さんを説得してくれるとは‥‥。お陰で命拾いした。感謝するぞ」
アトラスも手を重ねてきた。
ペルセウスは、「いえいえ、そんな‥‥」と、照れ笑いをしていた。
それを見ていたアテナがメデューサになにやら耳打ちし、メデューサがアテナに耳打ちを返した。
アテナはうんうんと頷き、そして、ニコニコと楽しそうに診察を続けた。
実はアテナはメデューサに、「どうして毒薬を撒かなかったの」と聞き、「風向きがまったく読めないので怖くて撒けなかった」と教えてもらったのだ。
メデューサは、「でも、ペルセウスが協力すると言わなかったら、婆ちゃんは一か八か毒薬を撒いたかも知れない。信用できそうだから、婆ちゃんはペルセウスの話に乗ったんだと思う」と付け加えた。
ペルセウスの人柄が手柄をたてたのだと、アテナは嬉しくなった。

診察の結果が出た。
メデューサの髪の毛から媚薬成分以外に、トリカブトの毒が検出された。
おそらくメデューサが髪の毛に振りかけて撒き散らした液体には、媚薬以外にトリカブトも含まれていたのだ。その毒の影響でメデューサの顔が腫れ、髪が痛んだのだ。
治療をする為にはゼウス軍の医療研究所に戻る必要がある。
部隊はゼウスの町への帰途に着いた。
二日後、部隊はゼウスの町に入り、アテナはメデューサの治療を開始した。
長老達は首を切り落とせと騒いだが、メデューサの痛々しい顔を見て、

「我々が手を下さずとも、神が罰を与えたもうた。我々はこの者の行く末を見守るべし」
　と、彼女を許す寛容さを見せつけた。
　遠征前にアテナが解毒剤を作り、長老達の石の状態を解いたのが効いている。
　もはやメデューサの首を切り落とす理由は無くなっていたのだ。

「しかし‥‥残念じゃのぉ‥‥」
　一人の長老が己の下半身を指で弾きながら、
「ほれ！、あれから、うんともすんとも言わん」
　と悔しそうな顔をした。
「あんなになったのは何年ぶりかのぉ‥‥婆さん、目ン玉ひんむいておったわ」
「わしんところもそうじゃ。婆さん、わし以上に驚いておった」
「最初からああなると分かっておったら、しょんべんを済ましておいたんじゃが‥‥」
「そうじゃのぉ、しょんべんが溜まって無ければ痛みも無かったのに。残念じゃ」
　今になって思えば、あれはチャンスだった。長いブランクが有り、自分の一物の使い道をすっかり忘れていたが、しょんべんだけに使うものでは無いと今になって思い出した。婆さんは見るだけで喜んでいたが、そんなに喜ばれるのなら娘や孫にも見せてあげたかった。わしを見る目も変わったじゃろう。
「くっ！、今更言っても詮無い話じゃ！」
　長老は言葉を吐き捨てた。

「さあ～！、皆の衆！、いよいよ、ヒロインの登場だ～！」
　ヘラクレスの掛け声を合図に、軽快な音楽が鳴り始め、壇上に三人の娘が登場した。
　彼女達はゴルゴン三姉妹。
　センターのメデューサは、顔のひび割れが消え、髪もさらさらに戻っていた。
「へへへ、兄貴～‥‥。三人とも綺麗だな～、おいら迷っちゃうよ」
「馬鹿野郎！、お前なんか相手にされるもんか、勝手に迷ってろ」
　掛け合いをする兄弟の後ろで、長老達が、
「ヘラクレスの奴、メデューサの事をヒロインだと云いよった」
「あの娘が主人公と云うのか‥‥。相変わらず、馬鹿垂れじゃのぉ～」
　と苦笑いしている。
　此処、ゼウスの町の大広場では、ヘラクレス部隊の帰還パーティが行われていた。
『メデューサ退治』と銘打った遠征からの帰還パーティである。
『ヒロイン』と紹介されたメデューサは少し恥ずかしそうだ。
「さあ～！、行くぜ～！」
　ヘラクレスが拳を天に突き上げた。
　音楽のテンポが速くなる。
　踊りのテンポも速くなる。
　身体をくねらせ、髪を振り振り、三人姉妹が、踊る、踊る。
「最高～！、いいぞ！、メデューサ！」
　観客から声が上がる。
　負けじと、
「いいぞ～！、スーちゃん！」
「いいぞ～！、エーちゃん！」
　長女にも次女にも声援が上がった。
　トロイアやクレタからの応援団だ。
「さあ～！、踊りはどんどん激しくなるぞ～！」
　ヘラクレスが人差し指をピン！、と伸した。
　三人姉妹が胸元から小瓶を取り出し、中の液体を髪に振りかける。
　長い黒髪が、まんべんなく振りかけられた液体でキラキラと輝く。
「ねえ？‥‥、これって、この前も見たよね？」
　弟のヒソヒソ声に、
「ああ‥‥何だかやばい予感がする」
　と兄が答える。後ろに居る長老の一人は、
「わしも何だか胸騒ぎがする‥‥もしかして‥‥いや、まさかそんなまねは‥‥」
　と胸を押さえた。
　ヘラクレスが、伸ばした人差し指を、
「そら！、そら！、そら！、そら～！」

くるくる回すと、ゴルゴン三姉妹が髪を大きく振り回した。
キラキラと輝く露が撒き散らされ、会場全体に柑橘系の良い香りが漂い始める。
「そら！、そら！、そら！、そら～！」
三姉妹が髪を振るたびに露が撒かれキラキラと光る。そして香りが広がる。
「やっぱそうだよ。おいら、ちょっと来だしたよ‥‥」
「そうだな。おれもだんだん来だしたぜ‥‥」
兄弟の会話を聞いていた長老が拳を握り締め、
「ふふふ‥‥来たか」
キラリと目を光らせた。
「さあ！、さあ！、さあ！、さあ！。大サービスだよ～！」
ヘラクレスが両腕を天に突き出し、頭の上で開いたり閉じたりすると、三姉妹がミニスカートの足を開いたり閉じたりしだした。
「うお～！」
会場の熱気が一気に高まった。
「ひゃ～。たまんねえ～」
兄弟が揃って首を突き出す。その後ろから、
「むむ～‥‥これは、けしからん‥‥」
長老も首を突き出した。
「爺さん、好きだね」
冷やかす兄に、長老は、
「何を言う！、わしは監視をしておるのじゃ！、お前達とは目的が違うのじゃ！」
顔を赤くして口を尖らせた。
「さ～、どうだ！、来てるか～？、皆の衆～！」
ヘラクレスが右手、左手、交互に突き上げると、
「イエイ！、来てるぜ、ヘラクレス！」
観客も右手、左手、交互に突き上げた。
「兄貴～‥‥兄貴は来てるか～？」
「いや‥‥もうちょっとかな‥‥」
「わしゃ、さっぱりじゃ、どないなっとるんじゃ！」
「爺さん、あんた監督だろ。だったら文句言いなよ」
「おう！」
長老は拳を振り上げ、
「こら～！、ヘラクレス！。こっちに、もっと、薬を、振り撒け～～～！」
と怒鳴った。
「え？、薬？」
ヘラクレスは声のした方に向き直り、
「薬って、何だよ？」

と聞いた。
「そこの娘達が撒いている薬じゃ！、それをもっとこっちに振り撒け～！」
「ああ、これの事か‥‥別にいいけど、香水も過ぎると身体に悪いぜ」
「香水じゃと？‥‥普通の香水なのか？」
「柑橘系って、普通だよな？‥‥」
ヘラクレスは首をかしげた。
その時、
「爺さん、爺さん‥‥あそこを見てみろよ‥‥」
双子の兄がヘラクレスの股間を指差した。
「あれが、どうした？」
「小さい」
「ほんに！」
どうやら媚薬など使っていないようだ。
そう分かったが、言い出した手前、こう主張するしか無い、
「いいから、けちけちせず、もっと振り撒け～！」
そして、
「わしゃ、香水が大好きなんじゃ～！」
と付け足した。
「あい！、あい！、あい！、あい！、長老様は、香水、大好き！」
ヘラクレスの掛け声で三姉妹が長老めがけて髪を振り振り。
長老達は霧に包まれた。
「お前達が、来るだの来ないだの、紛らわしい事を言うから、大変な事になったぞ」
かんかんになって怒る長老に、
「御免、御免」
兄は頭を掻き掻き謝った。
「なんでこんなに香水臭いんだよ～」
文句をたれる弟に、長老と兄は、
「うるさい！、我慢しろ！」
とゲンコを落とした。

「さ～！、いよいよ、クライマックスだよ～！」
ヘラクレスは楽屋の方を見て、両手で手招きした。
すると、
アテナが登場した。
続いて、ジプシー少女。
さらに、東洋の女僧。
さらにさらに、美人コンテストの出場者が続々と登場した。

「今年のコンテストは、途中で終わっちまったけど、出場者の健闘はたたえなくっちゃいけない‥‥」
　ヘラクレスは両手を上にあげ、
「拍手〜！」
　と、手を叩いた。
「イエイ！、みんな、良かったぞ〜！」
「今年の美人コンテストは、最高だったぜ〜！」
「全員、優勝だ〜！」
　人々は喝采し、出演者達に惜しみない拍手を浴びせた。
　その声援に応えて、
　アテナは手を振る。
　ジプシー少女は、タタタン！、と足を打ち鳴らす。
　東洋の女僧は、南無〜と拝んだ。

　メデューサの横に、何やら小さい物が有る。
　その前で出演者達がうろうろしているので、チラチラ見えたり隠れたり、物凄く気になる。
「いったい、何じゃろな？」
　長老は目を凝らしてじっと見つめた。
「おお〜！、あれは‥‥」
　物ではなく人間だった。
　長老はその人物を指差し、
「こりゃ〜！、ヘラクレス！、そのお方を皆に紹介せんか！」
　と怒鳴った。
　ヘラクレスは長老が指差す人物を見た。
　小さい人物だった。
「馬鹿垂れ！、そのお方こそ、今回のヒロインじゃろが！」
　長老が指差す先に、ゴルゴン婆さんが立っていた。

（第一話、美少女メデューサ、完）